

犬部通信 号外

こども病院では、ファシリテッドッグを職員の一員として迎えるため、2024年からプロジェクトチーム「犬部」を結成し、導入に向けて準備を進めています。

病院で働くファシリテッドッグは、専門的な研修を受けた医療従事者であるハンドラーとペアで活動します。主な活動は、「ふれあいや遊びによる支援」「検査や治療への付き添い」「緩和ケアでの寄り添い」などで、子ども達やご家族が、犬とのふれあいを通じて、ストレスの軽減や精神的安定、少しでも前向きな気持ちになれる等の効果が期待できる存在です。

こども病院では、多職種がチームとなり子ども達のために様々な工夫と共働することで治療や入院生活を支えています。このチームに、ファシリテッドッグが加わることで、さらに療養環境の向上に繋がり、今まで以上の（人の力を越えた）安心と安らぎを提供できると信じています。

しかし課題は多く、犬が病院に入ること自体に抵抗を持つ人もいます。すでに盲導犬等の介助犬は院内に入っていました。アニマルセラピーの効果を知ってもらうために、ファシリテッドッグの効果を理解してもらうことから始めました。また、犬好きばかりではありませんので、その対応などを考えながら研修会を開催し、導入の準備を進めています。

そして、診療報酬の対象ではないファシリテッドッグを県立病院でどのようにして迎えるか、資金調達が大きな課題でした。様々な検討を繰り返した結果、ただいま絶賛

- クラウドファンディングを実施中です。
- 小児医療の最後の砦として、子ども達にとって最善の医療とケアを提供できるように、ファシリテッドッグの導入と今後の活動にご支援とご協力をよろしくお願い致します。



兵庫県立こども病院 寄附募集中!

入院する子どもたちに
ホスピタル
ファシリテッドッグ
を迎える
プロジェクト

ひょうご
こども

ご寄附は
WEBで

Concept コンセプト

●**基本理念** 周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になって子どもたちの健やかな成長を目指します。

- 基本方針**
- 1. 患者の権利を尊重した医療の実践
- 2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
- 3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
- 4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
- 5. 親とこどもが一体となった治療の推進
- 6. こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
- 7. 医療ボランティアとの協調による患者サービスの向上
- 8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化



編集後記

6月号の編集を終えて。あちらこちらで紫陽花の花が芽吹き始め、初夏の訪れを教えてください。

今月号の「げんきカエル」では、ファシリテッドッグについての取り組みや小児の骨折について紹介しました。

梅雨のじめじめとした気候や、これからの猛暑に備えて、体調や怪我に気をつけてお過ごしください。

もうすぐ七夕。短冊に込めた願いが、夜空に届きますように。

皆様にとって、心身ともに健やかな夏となりますようお願いしています。

- 委員 長：貝藤裕史
副委員 長：濱田由佳
委 員：猪股高爾 山田健太
吉井拓真 菊池真由美
松本智美 松下伊都子
上西美奈子 辻田利香
中村直子 鷹尾伏彩
前田貴彦 迫田萌
井上徹 林勇斗
三木貴久子 穴戸健一

げんきカエル No.88



兵庫県立こども病院
ニュースレター



令和7年(2025) 6月1日

新任幹部職員のご案内

■副院長 香川 哲郎



このたび副院長（医療連携・医療情報・感染対策担当）を拝命しました。医療を取り巻く環境が厳しさを増す中、職員や地域の皆様と連携を図りながら、DXの推進による業務効率化や、安全で質の高い医療の提供に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い致します。

■管理局長 高崎 徳子



4月に管理局長に着任しました高崎です。周産期・小児医療の総合施設として高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体となって子どもたちの健やかな成長をめざしています。当院の一員として、病院スタッフや地域の医療機関の皆さんと力を合わせて取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い致します。

■看護部長 奥 由香



4月から看護部長で着任しました。小児専門病院として歴史と伝統あるこの病院での役割に日々重責を感じながらも、小児医療に真摯に取り組む職員や、頑張っている小さな患者さんの姿にも励まされています。早くお役に立てるように努めてまいります。どうぞよろしくお願い致します。



次は僕の番だ 尾川 隆起

私は先天性心疾患（心室中隔欠損、僧帽弁閉鎖不全）を持って生まれ、1歳の頃に大きな手術を受けました。もちろん手術の記憶はありませんが、幼い頃の思い出には、こども病院での診察や検査の日々が残っています。それでも、辛い記憶はほとんどなく、半分遊びに行っていたような感覚が今でも心にあります。

病弱だった幼少期、毎月のように何かしらの病気で病院に通い、入院と回復を繰り返していました。そのため、「病院=元気になる場所」という前向きな印象があり、医療に携わる人たちへの憧れも自然と芽生えました。やがて小学生になり、バレーボールに打ち込むようになった頃、小学4年生で走り方について周囲から指摘を受けるようになりました。自分では気づいていませんでしたが、両足のかかとが地面に着かなくなっており、整形外科で「アキレス腱が短い」と診断されました。そして、その年の夏、こども病院で手術を受けることになったのです。

物心ついてから初めての手術は、不安でいっぱいでした。手術前夜も眠れずにいた私に、夜中の巡回で来た男性看護師さんが声をかけ、励ましてくれたことで、ようやく眠ることができ、無事に手術を受けられました。この体験が、「ずっと助けられてきたから、次は自分が助ける番だ」と思うきっかけになりました。

それから約12年、3度の手術を経て、目標だった兵庫県立こども病院の看護師になることができました。療養が困難な子や家に帰ることすら難しい子どもたちと関わる中で、小児在宅医療の受け皿の少なさを実感し、訪問看護ステーション「ちいきと暮らす」を立ち上げました。現在は管理者として活動しています。いつか、私たちが関わった子どもたちの中から、「次は私の番」と思ってくれる子が生まれたら嬉しいなと願いながら、日々奮闘しています。



子どもの骨折

皆さんは骨折されたことはありますか？骨折は誰にでも起こりうる病態で整形外科医が遭遇する外傷疾患の中で最もポピュラーなものです。正確には「骨に対し相当量の外力が加わり構造上の連続性を絶たれた状態」と定義されます。高齢化が進む日本では、加齢に伴う骨粗しょう症などが原因となり脆くなった骨が折れる高齢者の骨折が社会問題となっています。一方、子どもの骨折も増えているとされています。子どもの骨折には大人とは違う以下のような特徴があります。

① 骨癒合が早い

成人に比べ圧倒的に骨癒合するまでの期間が短くて済みます。子どもの中でも年齢が低い方がさらに早く骨癒合します。

② 自家矯正能力がある

大人の骨折は曲がったまま骨癒合するとそのまま変形として残りますが子どもの骨折の場合、自家矯正能力があり少々変形したまま骨癒合しても成長とともに改善していきます(図1)。

症状としては骨折した部分の疼痛ですが、子どもの場合、どこが痛いのかよくわからない場合もあり注意が必要です。「触ると泣く」、「手を使わない」、「足に体重をかけられない」などの症状も骨折の可能性もあります。

原因で最も多いのは転倒や転落ですが、親の見てないところでの受傷もあるため注意深い観察が必要です。

診断については十分な視診、観察で疼痛部位を予測し、最小限の触診をして、骨折の部位を確認したのち、X線(レントゲン)撮影を行います。受傷直後にはX線で骨折を確認できないことや、骨折線が現れず弯曲する急性塑性変形と呼ばれる病態もあります。また骨折に関節脱臼を伴うこともあります。

治療には保存療法と手術療法があり、X線所見を参考にして治療法が選択されます。

子どもの骨折は上記①②の様な特徴があるため、手術をしない治療法が選択される場合が多いです。しかしながら、自家矯正されない変形もあるため正確な判断が要求されます。

お子さんの骨折を疑った場合には整形外科を受診しましょう。



(図1) 0歳児の上腕骨骨折

左上腕骨の分娩時骨折、わずか2週で新しい骨(仮骨)ができています。曲がってくっついても成長とともに自己矯正されてくる。



受傷時

受傷後2週

受傷後2か月

受傷後3年